展望

歌集を読む楽しみ

金子智佐代

夕映は吠ゆるがごとく樹をつつみ晩秋の道さびしくてならず　栗木京子

旅のはじめは旅のをはりに似てさびし足元に紺のトランクを置く　小島ゆかり

さびしさは見てゐるほかなしまばたきを繰り返すやうなそのツイートも　米川千嘉子

一首目。真っ赤な秋の夕映が樹木を包んでいる、そんな自然の圧倒的な美と静寂を眼前にした人間われのさびしさ。四句までの客観描写から一転、傾れるように感情を解放する結句は「吠ゆる」と遠く響き合う。

二首目。旅のはじめの、あの何とも言えない感覚、あれはさびしさだったのか。名付けられて初めて顕在化する感情がある。思わず納得の上の句。紺のトランクはさびしさの象徴のように足元に置かれる。

三首目。個々人が抱えるさびしさ。さびしさを払おうと瞬きのように繰り返されるツイート、その行為のさびしさ。現代の光景を無視することなく、危ぶみつつ「見てゐる」作者。結句の言いさしに切なさが滲む。

二〇一八年発行の三冊、栗木京子の第十歌集『ランプの精』、小島ゆかりの第十四歌集『六六魚』、米川千嘉子の第九歌集『牡丹の伯母』から抽出した三首である。今回「さびし」に関わる歌を引いたのは何か定点があればという軽い気持ちからだが、比喩の独創性など、改めて一首一首の力を知ることとなった。常に注目され、良い歌、優れた歌集を当然とされる中、それぞれの歌集はその期待を軽々と越え、誰のものでもない清新で豊かな世界を屹立させている。

「短歌」二〇一九年七月号の企画「話題の歌集を読む」はこの三冊を「現代短歌界を牽引している迢空賞受賞歌人三人の充実した歌集」として、永田紅、斉藤斎藤、佐藤弓生、大辻隆弘四氏の鑑賞座談会を掲載する。座談会で気になったのは、栗木の社会詠について「私はもう戦争に行かないだろうという、現実の社会的立ち位置がにじんで」いるとした斉藤の発言である。

冬の日の校門ひらかれ戦争に行けるからだの男の子らの見ゆ　栗木京子

一瞬にして、過去の戦争、現在、未来への危惧を交錯させた優れた社会詠だと思う。この歌に傍観者的な匂いがあるのかどうか。

この問題、思えば、二〇〇六年には小高賢、大辻隆弘、吉川宏志による大論争が起こった。社会詠に常時つきまとう難題なのだ。

吉川宏志は二〇一四年の時評で、

「外部に立っている／立っていない」という軸の立て方は、東日本大震災の後によく言われた「当事者か／当事者でないか」という二分法にも通じるものがあるのではないか。（略）外側からの視線であるからこそ重要なのだ、という面もあるのである。

と書く（『読みと他者』）。いずれにせよ様々な意見に触発され、読者自らが考える、この時間が大切なのかもしれない。

一首一首歌集を読み進める、すると一首だけでは見えなかった、色合いやうねりや思索の深さや詩性やユーモアや人生や魂の記録などが見えたりする。次もそんな一冊である。

四月に逝去された橋本喜典氏の第十一歌集『聖木立』から。視覚を病む九十歳の作品。

並み立てる大き欅は三月の天に触れつつ芽吹けるならむ

清明の空なるさくら根方にはそこに根づきて菫がそよぐ